復讐西海硯

十返舎一九作

歌川豊国画

へ13
2378
156

十返舍一九著
哥川國貞畫　人名卷二冊

浮世西海硯

檜垣五郎兵衛
玄海灘右衛門

文化六乙春發兌
書房聚寶八堂
芽街近江屋版本

遠 3
2378
156

檜垣五郎兵衛
玄海灘右衛門

緒言

敵討

西海眼石前編

倘ホ様別浪速津より名高き檜垣船の船況素名屋徳蔵らの事跡併ニ西洋の怪異あること著作し侍ふ行ふ今まことあるよ作しき檜垣の五郎と編るさて則ち司ケ関乃勇壮狼戻の小説と文とをかざり立て繪嵯峨の亜ホ弟七海し全部六編の藤ノ松子なる初妻の朝来丸よ孫のさん〜浮手ヲ執とあげらるハ法師の狂風ホ事のさる船ノ中みと〜の死化

十返舍一九識

青木のまさはるよ
宝丹おろをな問屋
大黒の法ちのよ
とるる金あつまる日

○播磨曽根侍臣
檜原田寸久馬
異悪濁乱ふして
狩猟を好み
大酒ふ
沈湎生
淫欲塵の苦ふ
苦て
意馬心猿已を害を
防風冨海之細魚夫
冥途八佐彼岸より
入海の渡を渡て泛
来のるつぎ〳〵
△頂所町ふ
この怪異
あるを七人の
乗侍
ふるをを

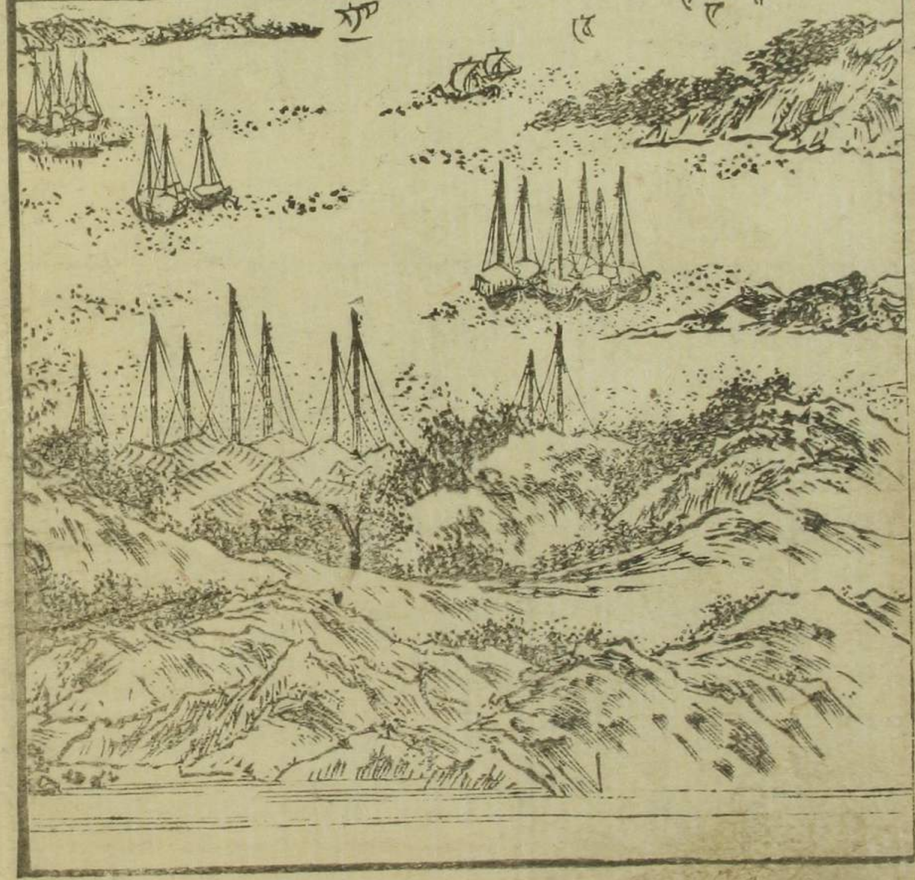
○掘垣五良兵衛
勇性狼戾ふして
狩猟を好む
満面動き
力量又衆
目を怒
を奇せ
来曽有の
豪傑を
藝弘宮鳥之神仗
海龍の国宝殿の町ふ住と雖
おやく住来ふ出て人を更くまるも
水毎ふ関あけるゆめ〳〵是無き夫
のはをふしめのあるうとて出人これを
宝殿ふを住て出ふ怪ふしふ出を

室津の白鶴
性附よう此流ふ白
き花をこころゞ
今ゆ絶て世天
界空中ふあ〜一
見ることそなの
大るるて絶望のわ〜しらう
播州室の
遊女尾山
此津の遊女
町ハ小西町とゆる中程ゆう東
横町ゆあり五庫より備前湯ふ
ゆるとゆふ流ゆ〜伝て此世無高峯伝ふと
異ゆるうしそ

○海賊首領
玄海灘右エ門
焼勇猛壮
衆と宮ひ
却
盗と
る〜
西海と横行して
賈船の財宝と女人を
筑列 桝川之河虎
綾波の玉桝川のまつこゝふ
この川虎名〜〜〜〜〜
何岸ゝ上り成ゝ角力とゝ
ゆふこゝ有〜〜渚国
産毛集より

播磨室津風景

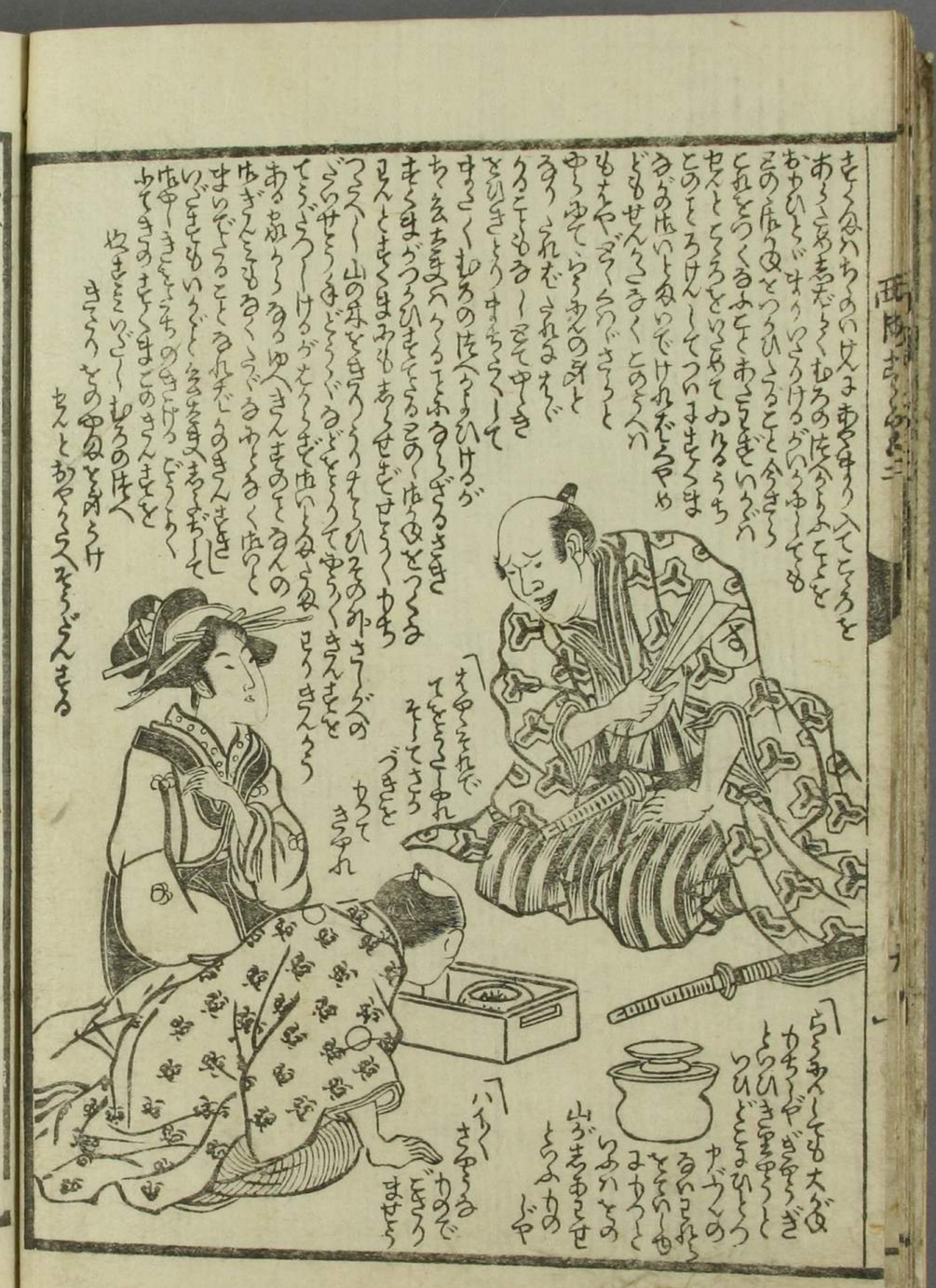
摂津国室の津より播磨の大坂より海上九十里大坂より西へ十里
室津より二見まで七里二見より室津へ十三里
此所は西国往復の船出入の所なれば
旅館多し西の地にて
方三町の港なり南は
海にして東は西北
の方は高き山にて山
を前後に負て
町家はそつぎりなる
石垣
高く積上新下地
取合なく積たる也

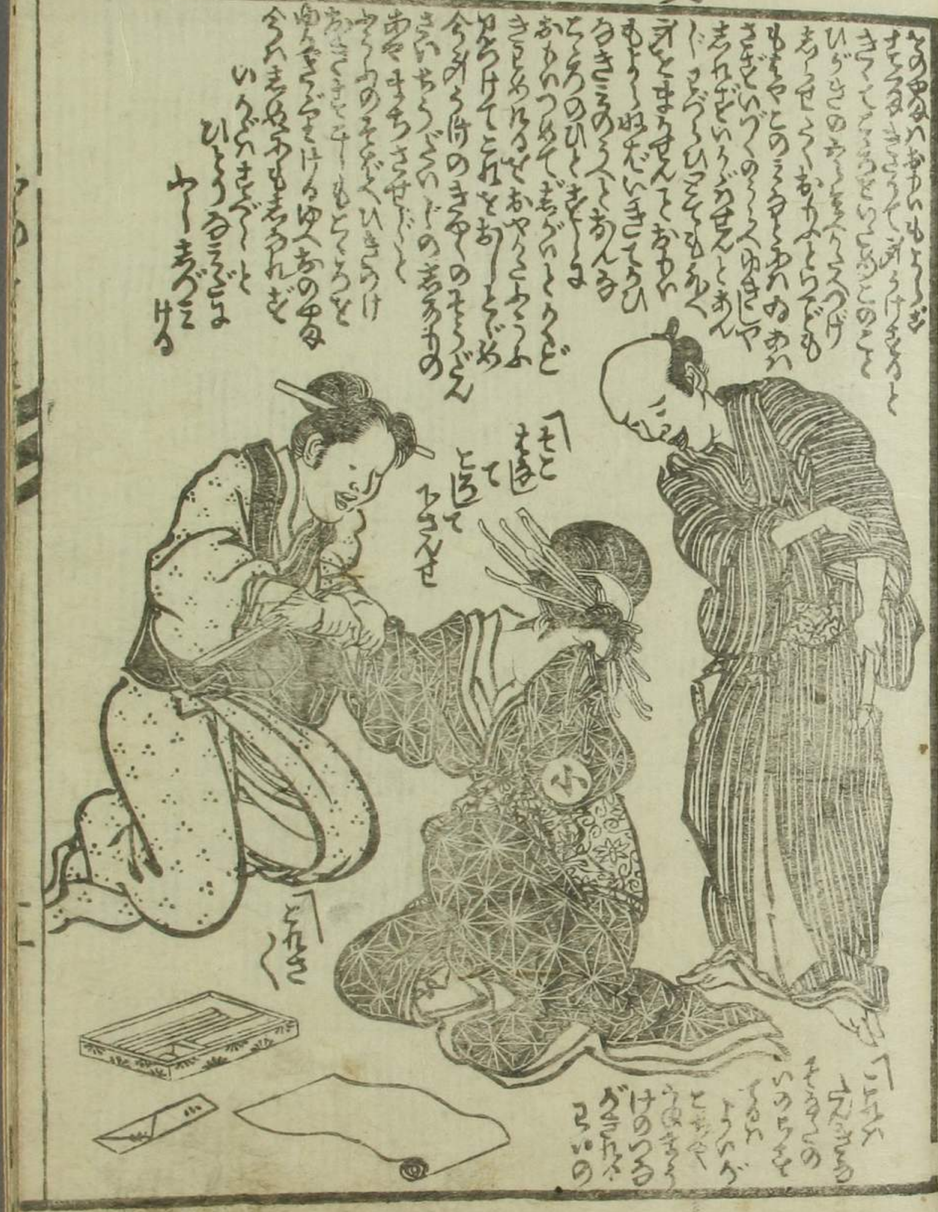


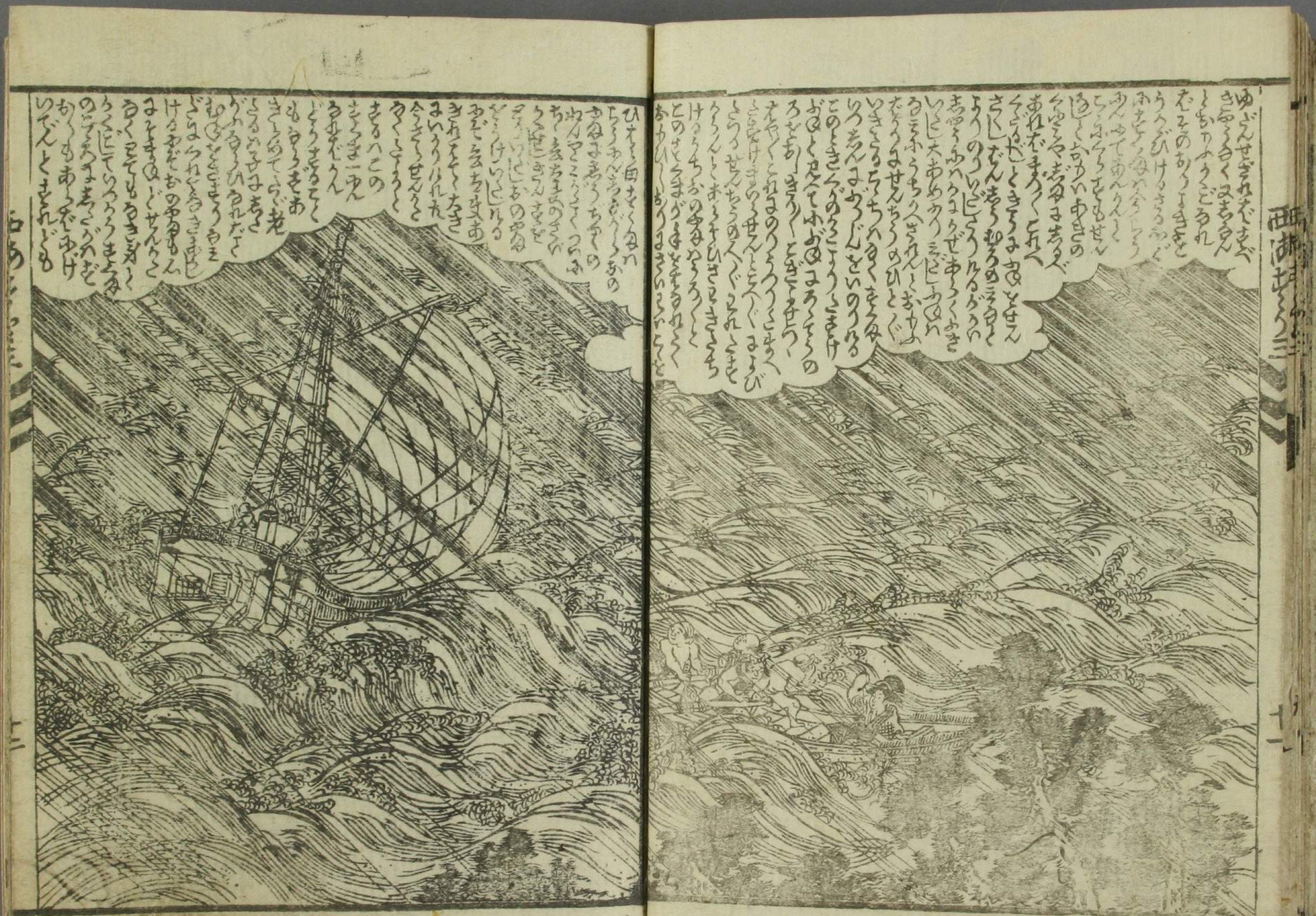
脊戸まで雁木
脇とまうけうつ室
明神八町の南に有
は所の海岸数て
屏とをうぶ如く
洋中中小岩多
おのく怪山石斉石
あり て当所一箇の
勝景なり 妻町の
あり 当備後乃
尾の道より似
ようなれども 雁木
多く小野町と
いひしかの
名なりしや

げんろくのそうがん
げんろくのそうがんとの山と

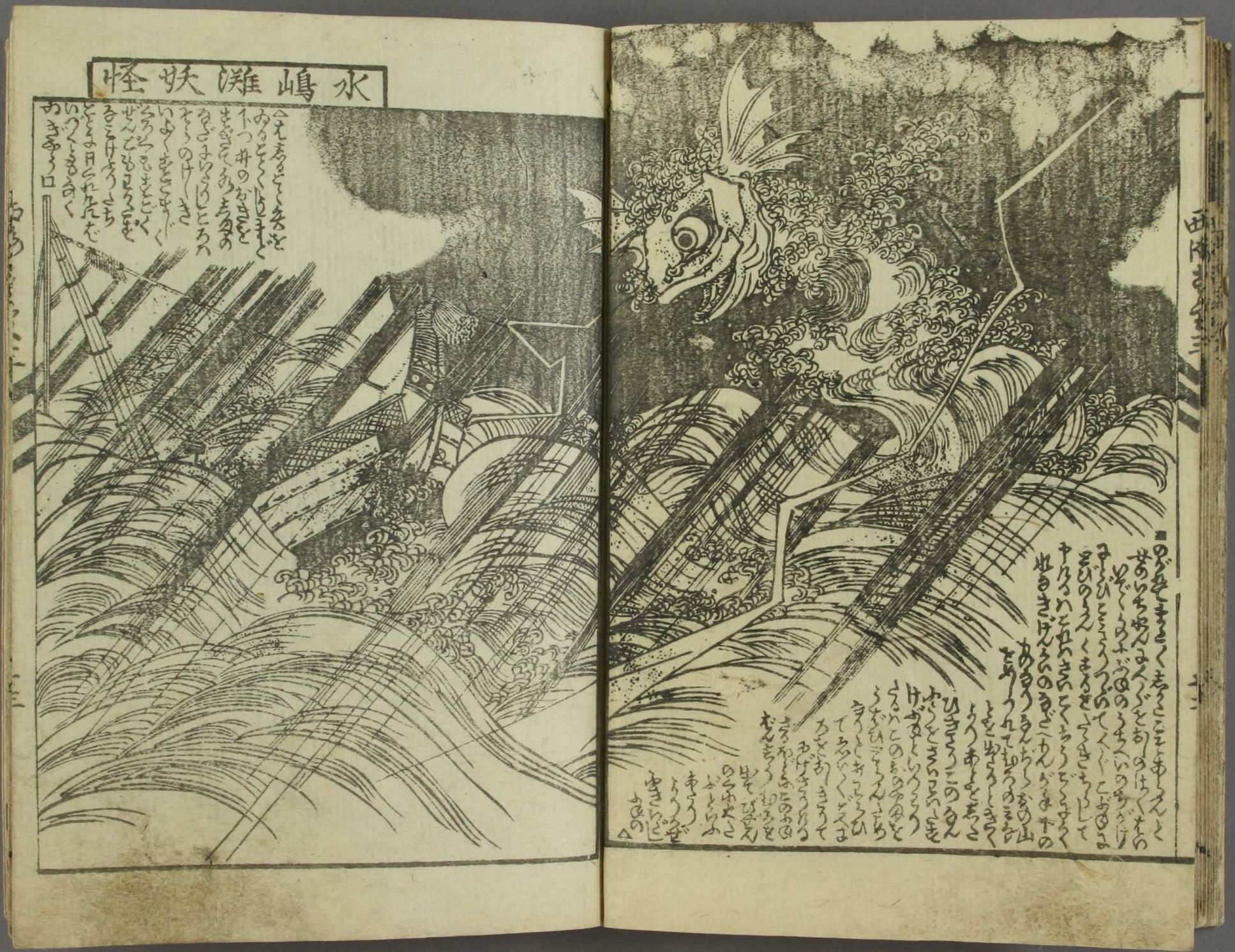
さ
五







ゆどんせざれでまぐ
きゅうくゆくゆちゅん
くちゅりゅうごゅれ
むそのゆうこゅきを
うゅびけるさるゆく
ゆきゅうゆゆんゅん
ゅうゅうゅうきゅゅ
ゅしくゅゅいゅきの
ゅゅゅゅゅゅゅゅゅ
あれでまゅくゅれく
くゅゅゅ
さゅゅむんゅゅゅゅゅゅゅゅゅ


水鳴雖妖怪

備後阿伏兎海潮山風景

一九著

第五回

長州赤間関稲荷町之図

赤間関女芸者之姿

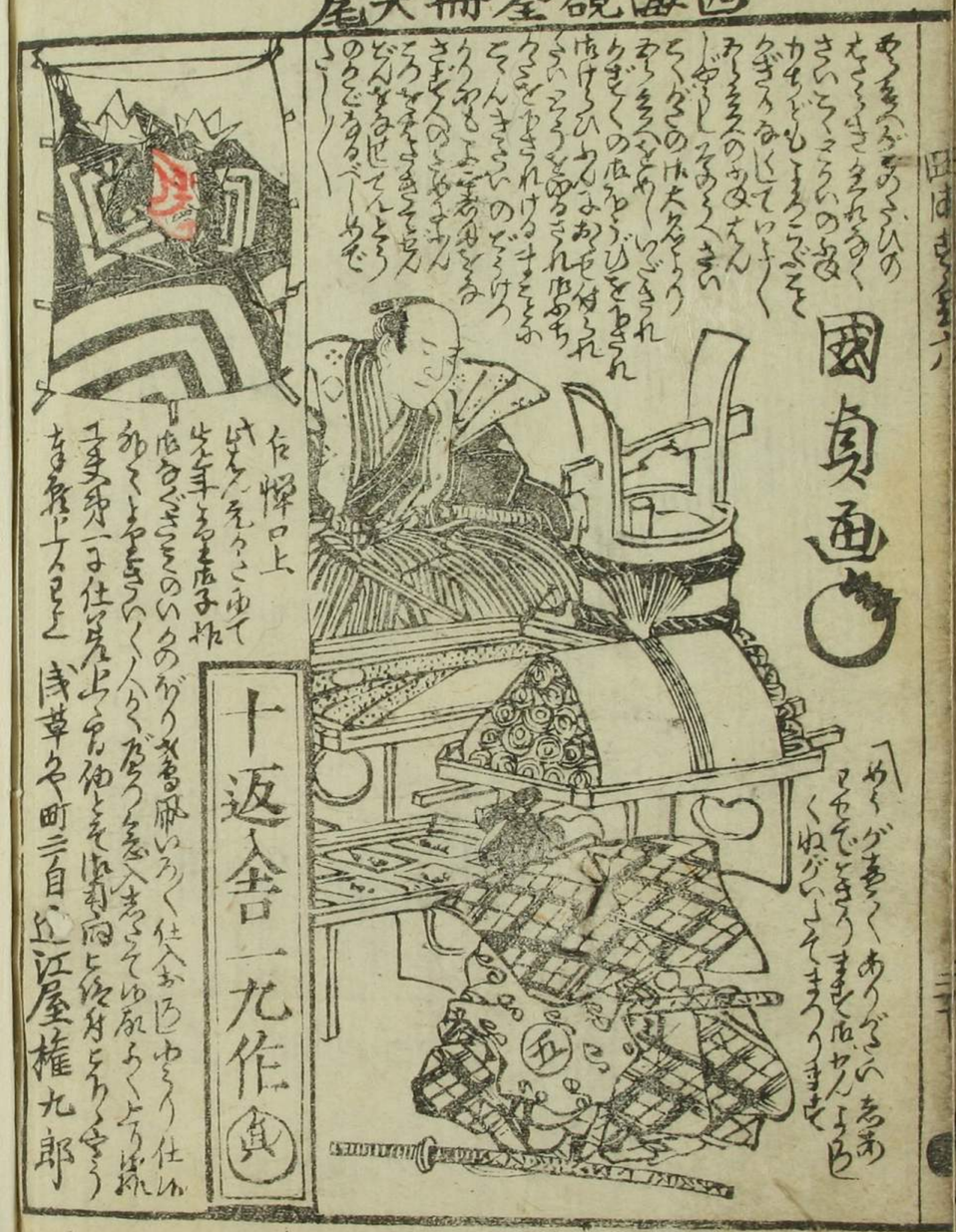
○比布ぞちよく出ひろうナ
○寿延湯　毎人さいの目
さんちんさんごちのこちやり
のぶせつくうそ赤一切まする
○鳥屋羊油　赤ぶくまる
うそふひやくそわぶくそれ
まろひせんさうどくそ赤ゆ
唐ゆ赤　ロ戸むろ町三丁め
谷口半兵

乾元品宮嶌之景

殿嶌

△八丁堀意恨
仇討

一名昭元
みて出来は全八冊
東京 ちとせ屋



作悔口上
浅草名町二百　江屋権九郎